

平成 29 年度ボランティア活動等に関する調査研究助成報告

伊藤 駿

(大阪大学大学院／日本学術振興会)

1. 問題設定

本研究の課題は、被災地ボランティアに参加する／した、教職志望の大学生（以下、教職志望学生）にとってその経験がどのような意味を持つのか明らかにし、より良いボランティア派遣の仕組みや目的を提案することである。研究代表者は東日本大震災以降、教育領域を中心に復興支援事業に携わってきた。そうした中で、震災からの時間が経過するとともに、原発事故の影響を受けた地域からの避難者に対する差別の問題、農産物や海産物に対する風評被害の問題など、復興の問題は被災地「内部」にあるのではなく、むしろ被災地の「外部」にあるのではないかと、という疑問を抱くようになった。そうした問題は、大人だけでなく学校現場におけるいじめ問題として子ども間の関係性の中でも顕れるようになっている。

一方で、研究代表者はこれまでに多くの大学生を引率して被災地を訪問する機会に恵まれた。そうした過程で、震災から時間が経過するにつれて大学生の被災地に対する認識が変化していることを体感していた。特にメディアからは復興に向かう被災地という情報を受けているが、実際に被災地を訪問してみると、未だに避難指示が続き人ひとりいない町並みや、津波の爪痕が残る震災遺構の姿を目の当たりにし、そのギャップに気がつくのである。今回の研究は、こうした研究代表者の経験に端を発し、被災地支援活動に参加する学生にとって、ボランティア活動が持つ意味や意義を明らかにすることを目的としている。ただし、ボランティア活動の種類は多岐に渡る。そこで、前段の課題意識から教育に関連する活動に注目するとともに、教員志望の学生の意識変容を中心に捉えることとした。しかし、教員志望の学生が必ずしも教員になるとは限らず、逆もまた然りという状況があることを踏まえ、教員志望という属性は説明変数の一つとして認識し、あくまで教育の側面からの復興支援活動に着目し、その過程で学生たちの被災地に対する意識がどのように変化するのか／しないのか、という問いに答えることをめざした。以下、本報告書では、調査の内容及び得られた結果、そして今後のボランティア活動に対するインプリケーションを述べていく。

2. 調査内容

2.1. 調査チーム

本調査は、研究代表者の所属である大阪大学に拠点を置き実施した。その上で、これまで研究代表者と共にボランティア活動や学生の引率を行ってきた大学院生、研究者によって組織されている（表 1）。研究チームは 3 ヶ月に 1 度のペースで研究会を持ち、進捗報告を行うとともに、研究の方向性を協議した。

表 1 研究チーム

氏名	所属	担当
伊藤 駿	大阪大学大学院人間科学研究科 日本学術振興会 特別研究員	研究代表者
古田 雄一	大阪国際大学短期大学部 専任講師	アドバイザー
山口 真美	大阪大学大学院 人間科学研究科	量的調査
藤本 啓寛	早稲田大学大学院 教育学研究科	質的調査
櫻木 晴日	大阪大学大学院 人間科学研究科	量的調査
志津田 萌	東京大学大学院 教育学研究科	質的調査

2.2. 調査方法

調査方法は主に 4 点に集約される。第一に先行研究のレビューを中心とした文献調査、第二に実際にボランティア活動を行っている大学生・卒業生に対するインタビュー調査、第三にボランティア活動を行っている大学生に対する質問紙調査、第四にボランティア活動を行っている場面への参与観察法である。インタビュー調査及び質問紙調査については現役大学生についてはボランティア活動を行う前の事前調査と行った後の事後調査を行い、卒業生に対しては回顧的インタビューを一度実施した。参与観察は基本的に大学生が被災地に訪問する場面、被災者と関わりを持つ場面（講演会などを含む）で行っている。なお研究代表者は参与観察にあたっては、訪問先や訪問者に予め研究を行っていることの説明を行って調査に対する同意を得た。

2.3. 調査対象

調査対象は関東地方を中心に活動を行っている NPO 法人 A を対象とし、特に復興支援事業部 B に焦点を置き、調査を行った。匿名性の観点からその活動内容を詳述することは避けるが、上記の調査方法の全てに参加同意を得ている。また学会発表や論文の執筆にあたっては個人名が特定される情報は一切掲載しないことを誓約した。

3. 得られた知見

本報告書では、後述する成果報告内容のうち、山口ほか（2018）で発表した内容を中心にまとめることとする。述べる内容は主に2点にまとめられる。第一に、学生たちはなぜ被災地ボランティア活動に参加したのか、第二にボランティア活動の中でどのような意識変容が起こったのかということである。

3.1. 参加動機

学生たちのボランティア活動への参加動機は、その参加時期によって大きく異なっていることが明らかになった。震災の時点で大学生もしくは大学入学予定となっていた学生たちは、様々な団体が緊急支援として被災地入りしていたこともあり、個人的な動機というよりも、組織的な動機が強く働いていた。他方で、震災の時点で高校生だった学生たちは、震災の大きさを体感する一方で、時間的な制約などからその支援活動に携われなかったという感情から参加を決意していた様子が見られた。さらに、震災当時、小学生もしくは中学生であった学生たちは、震災に対して具体的な記憶はなく、「なんとなく大変そう」という感覚を有して

まとめ1：参加動機

ボランティア参加者の参加動機には、段階により質的に異なる傾向が見出された。この背景には、震災発生時の年齢や状況に起因する、「震災観」やなしえた支援の違いが考えられる。第一段階は震災発生時に主に大学生から高校生であったのに対し、第二段階は中学生、第三段階は小学生が多かった。また第三段階の参加理由の多様化は、被災地支援という側面よりも、キャリア教育という活動内容やメンバーの雰囲気等が選択に影響していることが明らかになった。

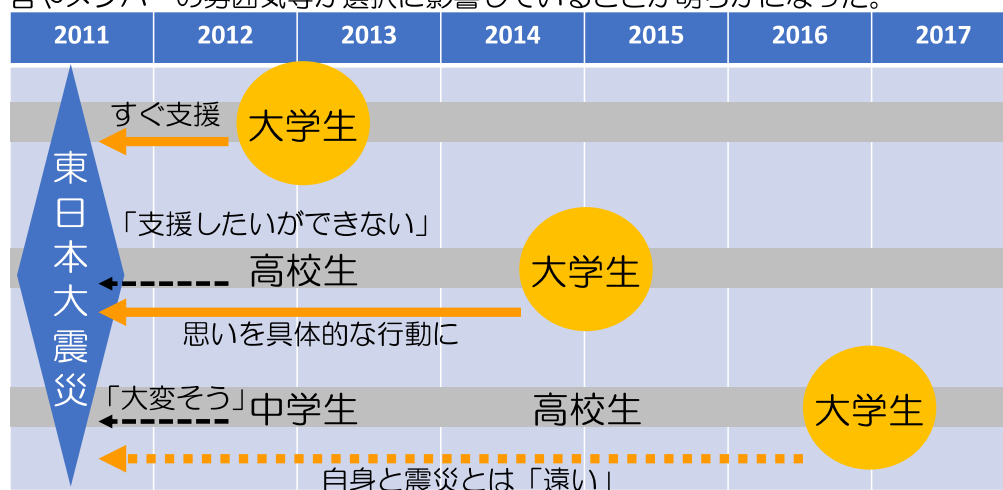


図1 参加動機のまとめ

いた。そのため、被災地に対する貢献というよりも、対象となった活動の特徴である、キャ

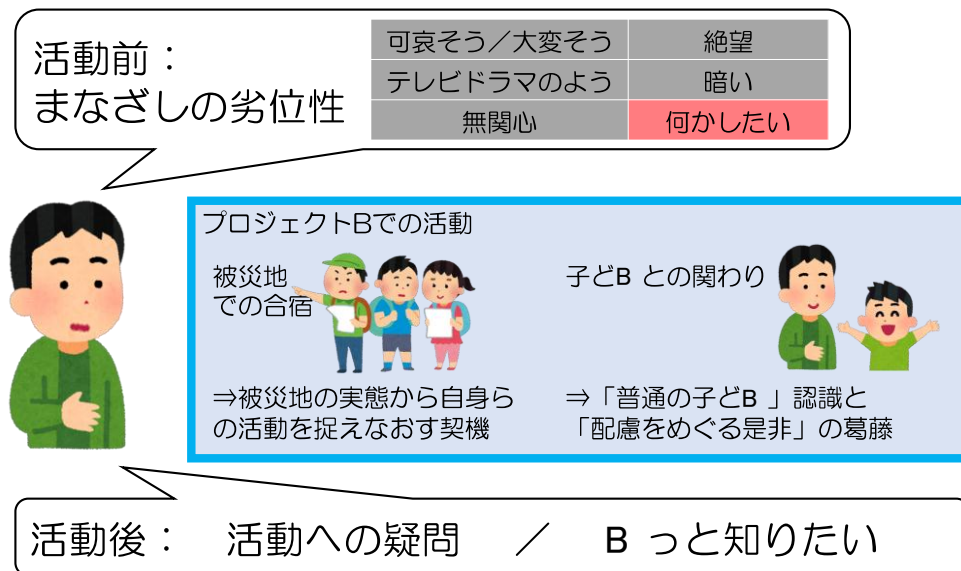
リア教育という観点であったり、他に参画しているメンバーの雰囲気といった理由で参加を決めたという声が聞かれた。簡単なまとめとなるが、震災から時間が経過すればするほど、活動の対象となる場における「被災地」性は後景化しているのである。これを時間の経過によって、支援が必要な被災地というイメージが払拭されるようになったと捉えるべきか、それとも震災の記憶が風化していると捉えるべきか、という点は議論の余地があろう。

3.2. 意識変容の諸相

続いて、活動を通じた意識変容について述べていく。主に被災地に対するイメージを本稿では論じていく。まず活動前においては、多くの学生がメディアから流布される情報もあり、まさに「テレビドラマのよう」と語ったり、大変そうというイメージを持っていたりしていた。他方で、そうした状況があるのであれば、自分が何かできるのではないか、という意識を持つ学生もいた。しかし、これらの意識は、いずれにせよ被災地に対してネガティブなイメージを有していることの表れと捉えることができよう（「まなざしの劣位性」）。

そうしたイメージは具体的な活動を通して、徐々に変容していく。被災地に直接訪問する

まとめ2：意識変容



大学生は、被災地支援活動を通じて被災地に対するまなざしの劣位性を取り去り、活動そのBへの疑問を呈したり被災地のことをよく知ろうとすること、すなわち自らの意識を変容させることで、被災地・被災者観を再定義している。

図2 意識変容のまとめ

機会や、子どもたちとの触れ合いを通して、自らの中にある被災地像が崩れ、再度構築されていくのである。ただしここで注意を要するのは、そうした被災地像の捉え直しは、被災地

支援が不要ではないかという意識へと変容することもありうることである。こうした意識変容の価値をどのように捉えるか、という議論もまた必要であろう。

4. 今後の展望

以上、簡単に本研究で得られた知見の一部をまとめてきた。我々研究グループは今後も成果報告を中心に研究を進めていこうと考えている。特に今後の課題として3点指摘して本報告書を締めくくる。第一に「教職志望」の曖昧さをどのように捉えるか、ということである。当初本研究グループでは、比較的明確な「教職志望者」が存在していると考えていたが、昨今の労働環境に関する報道などから教職に就くことを考え直す学生が多くいた。こうした状況の中で研究課題をどのように設定するのか検討が必要であろう。第二に今回対象とした団体は教育による復興支援ボランティアを行っていた。しかし緊急支援をはじめ異なる活動を行う団体は多く存在しているため、今後はその活動内容と意識変容の関係を検討していきたい。第三にボランティアに対する金銭的支援などについての外的要因を検討する必要がある。本研究が対象とした団体も年によって活動資金の調達が困難になるという状況もあり、年によって学生の金銭負担が異なっていた。より良いボランティア派遣の仕組みを提示していくためにも、この外的要因を含めたボランティア活動についての検討を進めていきたい。

5. 2018年度の成果報告内容

伊藤駿（2018a）「被災地支援という経験がもつ意味—支援者の意識変容に着目して」こども環境学会 2018 年大会。

伊藤駿（2018b）「あの震災を忘れない 忘れない—心のケアが今こそ必要」NEW EDUCATION EXPO.

ITO Shun（2018c）“Educational Action Research for Reconstruction in Disaster Area —Focusing on Transformation of Volunteer Students—” WERA Annual Meeting in South Africa.

山口真美・藤本啓寛・古田雄一・伊藤駿・志津田萌・櫻木晴日（2018）「被災地支援を通じた学生の意識変容 —教育支援団体での活動に着目して—」日本教育学会第 77 回大会。